

川の水を農業利用に可能としたトンネル状の用水路

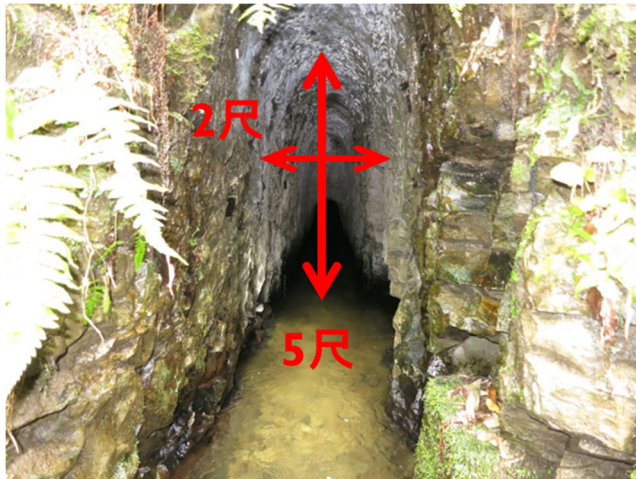
伝えたい千葉の産業技術 100 選

登録番号	第081号
名称（型式等）	房総の二五穴群
所在地	千葉県中部 君津市 大多喜町
設立（竣工）年	江戸時代の終わりから明治時代にかけて

選定理由

房総丘陵には、トンネル状の用水路を使って、田んぼに水を引く地域があります。トンネルは横幅二尺、高さ五尺（およそ 60cm×150cm）の大きさなので、「二五穴」と呼ばれます。長いトンネルは 200～700m もあります。これをつないで全長が 10km もある用水路を作ります。

米作りには水が必要です。しかし、房総丘陵は谷が深く、川と耕作地の標高差が大きく目の前を流れる川の水は農業用水として利用できませんでした。二五穴は、耕作地と同じ標高の川からトンネルを使って水を引くことで、川の水を農業用水として利用することを可能にしたのです。



「二五穴」の様子

用水名	開削年	
平山用水	天保 7	1836
蔵玉・折木沢用水	嘉永 6	1853
大戸用水	安政 2	1855
蓮見用水	安政 3	1856
笹・豊田用水	文久 3	1863
草川原用水	明治 9	1876

国立歴史民俗博物館と千葉県立中央博物館の共同研究で調査が行われた君津市蔵玉地区の用水路は黄和田畑で取水して、折木沢までおよそ 5km の長さがあります。地上に出ている部分はほとんどありません。蔵玉に古い文書が残されており、それによると嘉永 6（1853）年に完成したもので、現在も現役で活躍しています。5km もある長い用水路を水が流れるように少しずつ低くし、しかも山の中をくねるようにして掘っていくには、相当に高い測量技術が必要です。嘉永 5（1852）年「黄和田畑村本川より坂畑村字長崎折木沢村泉迄 諸入用大凡積帳」（君津市蔵玉 朝生家文書）によると、用水のトンネル部分は黄和田畑村（現：君津市黄和田畑）の粕谷卯之助、小苗村（現：大多喜町小苗）の又右衛門が請け負い、職人を集めて掘削作業を行いました。それ以外の部分については「人足仕立」とあり工賃が計上されていないため、地元の人々が掘っていたようです。職人と地元に住む人々の分業によって蔵玉・折木沢用水ができあがったのです。

江戸時代の終わりから明治時代にかけて房総丘陵各地で作られた二五穴は、100 年以上たった今でも使われ、房総の米作りに利用されています。

協力：千葉県立中央博物館 国立歴史民俗博物館 君津市立久留里城址資料館

参考：『房総のお宝シリーズ① 房総の二五穴』千葉県立中央博物館（2014）

『HUMAN vol.08 2016January』平凡社（2016）